2010年11月10日

ふれあい散歩道－4　（北原白秋編）

①「梅のはな」の句碑

・建碑：平成16年(2004)11月3日
・碑材：木曽石
・場所：久地梅林公園内

〔歌　碑〕

久地梅林の梅に

君がため未明(まだき)に起きて梅のはな

見に来たりけり　まさやけき花

（解説）

出典　歌集『白南風(しろはえ)』「砧村雑詠一詞書に、昭和8年(1933)2月27日夜、与謝野寛先生の還暦祝賀会を東京會舘に開く。その折り、梅に因みて捧げたる歌10首、但し各人同題なり」とあり、同日早朝「砧の渡し」で久地梅林に来て、この句を詠んだと思われる。白秋は昭和6年(1931)夏から昭和8年(1933)の厳冬の3年間、世田谷砧村大蔵に移住した心境を「自然随順の三年なり」と記している。

（北原白秋：きたはら　はくしゅうプロフィール）

1885年(明治18)1月25日～1942年(昭和17)は、日本の詩人、童謡作家、歌人。本名は北原　隆吉。詩、童謡、短歌以外にも、新民謡(「松島音頭」・「ちゃっきり節」等)の分野にも傑作を・・・・

（邪宗門　北原白秋記念館：福岡県柳川市立歴史民俗資料館）

1909年(明治42)3月、白秋が24歳のときに発表した処女詩集。明治39年4月から41年末に書いた121の作品を収録しています。

白秋と親交のあった歌人・石川啄木は、この詩集を読んで、日記にこう綴っています。二人は、当時開園したばかりの浅草の遊園地近くで、啄木は白秋の詩人としての成功を、白秋は啄木の就職を、互いに黒ビールで祝い合ったといいます。

＜時代背景＞　伊藤博文、ハルピンで暗殺。

＜主な作品＞

邪宗門・思ひ出・東京景物詩・桐の花・白金の独楽・雀の卵・水の構図等々

（以上白秋HPより収録）

②「禅師丸柿の句碑」(王禅寺)

今から 1250 年ほど前の奈良時代に建てられた寺と伝えられています。いく度なく災害や火事、戦火にあいながら残っている歴史のある寺と言われています。現在は真言宗の寺で、星宿山華厳院王禅寺といいます

北原白秋:「禅寺丸柿」の歌碑・・・王禅寺境内

{歌　碑}

柿生ふる　柿生の里　名のみかは禅師丸柿

山柿の赤きみれば　末房に秋は闌かたる
(たけたり)

もみぢ散りかふみれば

いちはやく霜か冴えわたる

新田義貞の鎌倉攻めの時に、消失した王禅寺を再建するために、等海上人は、応安 3 年 (1370) に寺の用材を求めて山中の奥深くに入りました。そこで甘みのある柿を発見し、村人たちに栽培を勧めたのが禅師丸柿の始まりとされています。

北原白秋は、柿の実が潤む秋の柿生の里をこよなく愛し、その風情を歌に詠んでいます。王禅寺にある歌碑には「柿生ふる柿生の里の・・・・・・まつぶさに秋は闌けたり」と刻まれています。現在、禅師丸柿の古木の多くは姿を消しましたが、入口谷戸付近ではまだそれを見ることが出来ます。

王禅寺正面山門

禅師丸柿歌碑

王禅寺あやめ池

(解説)

多摩丘陵にあって、川崎市域の北西部に位置する旧王禅寺村は、真言宗の名刹王禅寺をもって、村名が付けられました。現在、その村域はほぼ麻生区の王禅寺・白山・虹ヶ丘地区にあたります。王禅寺村は戦国時代までは麻生郷の内に含まれていましたが、江戸時代の初期頃までには独立して一村となり、村高は 192 石でした。王禅寺村は、初めは二代将軍徳川秀忠の夫人であるお江代の方に、嫁入りの際に与えられた領地(お化粧領)でしたが、お江代の方と秀忠が他界した後の寛永 9 年 (1632) には、徳川家の菩提寺である芝・増上寺の領地 (御霊屋領) となりました。

ところで、江戸時代の村の様子うかがうことができる貴重な資料として、宝暦 12 年 (1762) の王禅寺村の絵図があります。村内は、絵図の中央を走る尾根道のほぼ東側表郷、ほぼ西側を真福寺谷戸といいました。

(「かわさき散歩」より引用しました)

③「多摩川音頭句碑」(丸山教本庁)

{歌　碑}

多摩の登戸

六郎兵衛さまよ

藤は六尺　藤は六尺

いまさかり

丸山教本庁境内にある白秋の「多摩川音頭」の歌碑

(解説)

白秋が 1931 年 (昭和 6) に稲田村青年団からの依頼を受けて作詞した「多摩川音頭」。全 31 節からなる歌詞には、産物や自然、芸能など現在の多摩区を中心にした地域の特色が盛り込まれた。丸山教本庁の境内にある歌碑には、その一節が刻まれている。冒頭の「六郎兵衛」とは丸山教の開祖・伊藤六郎兵衛。白秋の弟が経営する出版社が、三代目伊藤六郎兵衛の弟の勤務先だったところから付き合いが始まり、作詞の依頼へとつながった。白秋はたびたび登戸に遊びに来て多摩川で鮎釣りを楽しみ、六郎兵衛と酒を酌み交わしたという。

(丸山教の歩み)

丸山教は、江戸時代からさかんであった富士信仰のひとつ丸山講からおこった。富士登山の際に山を丸でかこったしるしの笠をかぶったところから」この名がついた。明治 19 年 (1886) には丸山教本院をおき、富士山を囲む各地に分院や教会をおいて、明治 20 年代には信徒 138 万人を数えるほど飛躍的に発展した新教宗教である。

明治 13 年 (1880) には、多摩川の河原で大祈祷会がひらかれ、白装束、高げたの信者は多摩川の川原を埋めつくした。川崎はもとより、横浜・横須賀・三浦・津久井方面から 7、8 千人もの信者が参集した。登戸の当時の人口が千人を少しこえたばかりのことであったから、それはまさに大事件であった。(以下略)

丸山教本庁境内の花

丸山本庁境内のふじの花

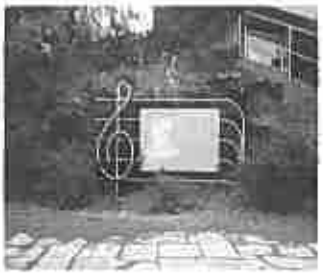
「かわさき散歩と登戸俳句会の資料より引用しました」

2012年3月4日

④「城ヶ島の雨」の句碑（城ヶ島　白秋記念館）

（歌　碑）

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は真珠か、夜明けの霧か、
それともわたしの忍び泣き。
舟はゆくゆく、通り矢はなを、
濡れて帆をあげたぬしの舟。
ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる、
唄は船頭さんの心意気。
雨はふるふる、日はうす曇る
舟はゆくゆく、帆がかすむ



白秋記念館

城ヶ島大橋

歌碑から記念館を望む

三浦市三崎町城ヶ島遊ヶ崎、昭和24年7月10日建碑除幕。高さ3㍍余り、下太の帆型1500貫の根府川石。城ヶ島の雨の一節の草書は白秋の自筆。昭和35年4月17日城ヶ島大橋架橋により現在地に移転。梁田貞の諸碑が添えられた。

この詩碑は、白秋謝恩の、白秋謝恩の文学記念碑として本来第1号の碑となるはずだった。戦事中城ヶ島が要塞地帯に指定され建碑の許可など及びもつかなかった。昭和16年企画した謝恩碑が実現したのは前記のとおり。白秋が生前希望した「帆型石が荒磯に突き刺したように」を具現したのは町をあげての協力によった。

「三浦三崎の白秋碑」三崎白秋保存会・城ヶ島観光協会編より引用しました」